

夙川学院短期大学 研究紀要 第44号 二〇一七年三月 別刷

「国語」における古典教育

—どのように古典に親しみ、学んでゆくか—

三
木

麻
子

「国語」における古典教育

—どのように古典に親しみ、学んでゆくか—

三木 麻子

キーワード…伝統的な言語文化 教科書の中の古典

教員免許状更新講習 和歌 歌ことば

はじめに

平成二十年に学習指導要領が改訂された。国語科については、中央教育審議会答申で「その課題を踏まえ、小学校、中学校及び高等学校を通じて、①言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、②実生活で生きてはたらし、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身につけること、③我が国の言語文化を享受し、継承・発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図る」と示されている(注1)。

①国語を尊重する態度や③我が国の言語文化を享受する態度を育てるにはどのような教育が有効であるのか、小学校から高等学校までを通じて考えてゆくべき課題が提示されたのである。さらに中央教育審議会答申には、(そのために)「言語文化と国

語の特質に関する事項」を設け、我が国の言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割や特質についての理解を深めたり、豊かな言語感覚を養ったりするための内容を示す」とも、「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」とも示されている。

そして、「伝統的な言語文化に関する事項」は、具体的には小学校の第一学年及び第二学年では、

(7) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表しあったりすること。

第三学年及び第四学年では、

(7) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗誦をすること。

(4) 長い間使われてきたことわざや慣用語、故事成語などの意味を知り、使うこと。

第五学年及び第六学年では、

(7) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文章について、内容

の大体を知り、音読すること。

(4) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

とあり、低学年、中学年では「昔話」「短歌」「俳句」「ことわざ」「慣用句」「故事成語」などを学ぶ。神話の復活として、小学校二年生で取り入れられたのが「いなばの白うさぎ」であり、例えば光村図書では、なかがわりえこ、東京書籍ではかわむらたかし、と名高い童話作家・児童文学者が文を担当しているが、作家作品の表現を味わうというより、「お話（神話）」を聞く、知るという点に主眼があるといえるだろう（注2）。

低・中学年で我が国の言語文化に親しみ、高学年になって、親しみやすい古文、漢文を音読し、生の古典に触れる機会が現れる。高学年からの「我が国の言語文化」とは「古典」とも考えてよいだろう。

この伝統的な言語文化に関する指導の重視を受けて、平成二十三年から新しい学習指導要領に沿った教科書が使用され、来年度二度目の改訂を迎えようとしている。古典の重要性が説かれ、それが定着しようとしている一方で、若者の活字離れ、国文学を学ぼうとする者の減少を受けて、近年、国文学研究者のなかでも、若年層の古典離れをいかに食い止めるかに腐心した試みが次々と発表され、耳目を集めている（注3）。

また、和歌文学会では、平成二十七年第六十一回大会で、「和歌を学び、教えるということ」と題した「学会創立六十周年記

念シンポジウム」が行われた。この報告は『和歌文学研究』第一二二号（平成28年6月）に載せられているが、「国語科教育からみた和歌指導のゆくえ」（注4）、「教育現場での体験を踏まえて」（注5）、「和歌をつくる」（注6）というパネリストの提言を踏まえて議論が行われた。稿者もこの大会に参加し、討論を見守ったのであるが、大学で日本語・日本文学を学ぼうとする学生が減少するなかで、その数少ない学生を教えようとするとき、高校時代に古典に親しんでいない者が大半である現状から、古典、それも和歌を専攻しようとする学生が出てこないのはやむを得ないと考えていた。そのため、それをどのように克服するかは長年重大な関心事であったし、古典に興味を持つ若者と向き合いたいという思いは切実である。同様の危機感が一体感として会場にあった。この時点は、小学校に古典教材が取り入れられてから五年目で、その全体的な効果はまだはつきりとみえていず、（注5）の渡辺健氏のご指摘のように、依然として、高校で古典を学ぶ機会が少ない高校生が多いと感じる状況が続いている。

そして、ほぼ同時期に『國語と國文學』（平成二十七年十一月特集号）は「教育と研究」をテーマとして発行された（注7）。ここでは、（注7）にあげた目次からもわかるように、おもに高校生への古典の授業の中で、いかに古典に魅力を感じさせるか、その実践がさまざまに述べられている。

そのなかで、大学教員であり、高校生への啓蒙活動として『万

葉集』の模擬授業を行う機会が数多い上野誠氏は、古典学習を、

〈教室古典〉〈受験古典〉〈大学古典〉の三つの範疇に分けて考察される。〈教室古典〉とは、小・中・高で学ばれる古典学習で、古典語彙理解・文法もあるが、調べ学習や討論も行う、熟読による味わいも実感する。〈大学古典〉に極めて高い連続性を認められるという指摘がある。一方で、暗記中心で、教員の創意工夫を駆逐する〈受験古典〉は害悪であるように思われるが、〈受験古典〉こそ生徒の古典学習へのモチベーションを保っているという意味で〈教室古典〉と〈大学古典〉を支えているという皮肉な指摘もある。高校生の学力により、難関大学を目指し大学習験勉強をする生徒と、逆に受験勉強をせずとも大学へ進んでゆく生徒がおり、実際は古典を味わう能力も高いと思われる高校生は、〈受験古典〉のみに時間を割いているというのが現状であろう。

そこで、改めて、大学受験から遠い所にある小学校からの「我が国の言語文化を享受し、継承・発展させる態度を育てること」が重要になるように思われる。

一、教科書のなかの古典

稿者は本学、夙川学院短期大学における教員免許状更新講習で、平成二十一年必修講習の一部を担当し、平成二十四年以降は選択講習として、「教科書のなかの古典」と題する講習を行う

ている。

平成二十三年から新学習指導要領に沿った教科書での学習が始まっていて、小学校でどれほどの古典が学ばれるのか、研究者として興味のあるところであり、小学校の教員養成を行っている本学で学生たちに古典の教え方をどのように伝えていかねばならないのかは喫緊の課題でもある。この意味において、現場で子どもたちと向き合っている先生方の現状を知ることのできる本講習は稿者にとっても有意義な時間である。

さて、平成二十四年度からの教員免許状更新講習にあたり、数種類の小学校・中学校の国語教科書、高等学校「国語総合」を参照し、当初は「国語教科書の中の古典」という題目で講習を開始した。ところが、当然のことながら、「我が国の言語文化を享受し、継承・発展させる態度を育てること」は、他の科目にも及び、小・中・高の音楽教科書も変化を見せている。そこで、次年度からは「教科書の中の古典」と改題し、音楽にも触れることとした。

三十名の定員で七月から八月の間に、二〜三回行う講習で、受講者は、最初は小学校教員の割合が高かったが、徐々に、中学校、高等学校、中学・高校一貫校教員の割合が増し、現在は小学校教員とその他の校種の教員が半々ということが多くなっている。

本学の講習では、まず受講者が講習に来られる前に、事前アンケートを実施し、最終試験の一部にも講習に対する感想を書

いてもらっている。その中に書かれることも多いのだが、なぜ小学校から高等学校までの教員を対象に講習ができるのかと、という疑問が受講者の中にあつた。

それは、先述のように小学校から高等学校までの全ての国語教科書を通覧してわかつたことであるが、現在の教科書では、扱われる古典教材はほぼ同じだからなのである。受講者は、講習後にはそれを納得され、各自の所属先が古典教育の段階の中で果たすべきことは何かと考察されている。

さて、〈注7〉にあげた小森潔氏は「春はあけぼの」(枕草子)を対象にした想像力を喚起する授業実践を紹介されているが、その中でその論の基となった藤本宗利氏の論(注8)から高校教師たちが「春はあけぼの」については「消極的・否定的であり」、「あれは中学の教材だと切り捨てる回答さえあつた」という言葉を用いる。

「中学の教材」(中学で教えていけばよい教材)という「春はあけぼの」軽視の発言への危機感である。

これは、杉村修一・藤森裕治両氏の中学・高校教師へのアンケート報告(注9)に〈この中で実際に中学校、高等学校の先生が何度も繰り返し学習した教材として、「竹取物語の冒頭」、「枕草子の冒頭」、「平家物語の冒頭」、「徒然草の冒頭」を挙げる〉とができる。これら四つの教材は中学校、高等学校で重複する教材であり、特に「竹取物語の冒頭」と「枕草子の冒頭」は、双方の学校間で重複する度合いがきわめて高いと言えよう)と

指摘する現状が生んだ現象であろうと推定される。

しかし、現在はそのどころではない。小学校でも三年生に「俳句に親しもう」で一茶・蕪村作品(東京書籍)、芭蕉・蕪村・一茶作品、付録に「百人一首を楽しもう」(光村図書)、四年生でも短歌・俳句作品が取りあげられる。

五年生は、東京書籍版では、〈日本の言の葉〉「古文を声に出して読んでみよう」に「竹取物語」「平家物語」「おくのほそ道」の冒頭、〈日本の言の葉〉「古文に親しもう」に「枕草子(春はあけぼのく冬はつとめてまで)」を載せる。光村図書版では、「声に出して楽しもう 古典の世界(一)」に「竹取物語」「平家物語」「徒然草」「おくのほそ道」の冒頭、「同 古典の世界(二)」に、論語・春暁(漢詩)に加え、「季節の言葉」の春・夏・秋・冬に、季語の揭示とともに、「枕草子」(春は、夏は、秋は、冬は)が取り入れられている。

六年生は、東京書籍版では、〈日本の言の葉〉「漢文を読んでみよう」に、「聞一以知十」「温故知新」「以和為貴」「春暁」を、「日本の文字に関心を持とう」でかなの種類を教え、〈日本の言の葉〉「古の言葉に学ぶ」で古人の格言をあげている。光村図書版は、「伝統文化を楽しもう 伝えられてきたもの」に狂言「柿山伏」、「『柿山伏』について」を読ませ、「日本で使う文字」を紹介する。

本稿では、小学校の教材との関連をみるために、中学校「国語」の内容も併せて見ておきたい。

東京書籍版は、「さまざまな古典作品を知ろう」と、一年で「伊曾保物語（犬と肉・鳩と蟻）」「竹取物語（天の羽衣）」「漢文（矛盾）」、二年で「枕草子（春はあけぼの）」「徒然草（冒頭・仁和寺にある法師）」「平家物語（冒頭・奈須与一）」、「古典芸能に親しもう」、「漢詩（春望・黄鶴楼にて）」、「三年で、「古今和歌集（仮名序）・万葉・古今・新古今」、「おくのほそ道（冒頭・三代の栄耀く光堂）」「論語」「古典の言葉を味わおう」を載せる。

そしてさらに本編の後ろに資料編が付載され、一年で「古事記（望郷の歌）」「土佐日記（旅立ち）」「伊勢物語（かへる浪）」「芭蕉・蕪村・一茶の俳句」、二年で「清少納言と紫式部」（三角洋一）「漢詩の世界」（日原傳）、三年で「恋の歌」（鈴木健一）『おくのほそ道』の旅（深沢了子）、「発展」「古典の文法」とあるように古典作品や研究者の文章を読ませる配慮がなされている。

光村図書版は、一年（いにしへの心にふれる）に、「音読を楽しもう いろは歌」「七夕に思う―語り継がれ、読み継がれてきたもの―」「竹取物語（蓬萊の玉の枝）」「今に生きたる言葉（漢文）」、二年（広がる学びへ）に「枕草子（春はあけぼの）」、「いにしへの心を訪ねる」に、「音読を楽しもう 平家物語（冒頭・扇的的）」「徒然草（冒頭・仁和寺にある法師）」「漢詩の風景（春暁・絶句（杜甫）・黄鶴楼にて）」、「三年（いにしへの心と語らう）」に「音読を楽しもう 古今和歌集（仮名序）」「君待つと―万葉・古今・新古今―」「おくのほそ道（冒頭・三代の栄耀く光堂）」「古典の

伝統」を載せる。

三省堂版は、一年（言語文化にふれる）「声に出して、さまざまな作品を読もう」に「朧月夜」の歌詞、和歌（持統天皇・貫之・業平）、俳句（芭蕉・蕪村・一茶・子規）、「春はあけぼの（春）」、「徒然草」、「平家物語」の冒頭、漢詩（春暁）、論語を取り上げ、「竹取物語（冒頭・天の羽衣）」を読ませ、『故事成語』を使って書こう（矛盾）、二年は（言語文化を楽しむ）「いろは歌」「枕草子（うつくしきもの・五月ばかりなどに山里に）」「徒然草（仁和寺にある法師・ある人、弓を射ることを習ふに）」、「漢詩の世界（黄鶴楼にて・春望・絶句（杜甫）」、「さまざまな見方・考え方を知る」」「平家物語（冒頭・敦盛の最後）」を載せ、別に「短歌の世界」で啄木などから現代歌人の歌を載せて、和歌の技巧を解説する。三年生では、（言語文化に親しむ）「おくのほそ道（冒頭・平泉）」、「中国の古典の言葉（書経・漢書・後漢書・十八史略・史記・論語）」を載せ、（さまざまな見方・考え方を知る）「好きな和歌を紹介しよう」に「万葉・古今・新古今」の和歌を載せる。三年には「俳句の世界」という、俳句・俳人・技巧を解説する頁もある。

さらに、三省堂版は「学びを広げる」資料編が別冊であり、その言語文化編には「古典作品の視覚的理解を助けるようなカラー写真や、「百人一首」「古典の冒頭二十五編」「名言・格言・ことわざ」など本編には載せられない量の作品が掲載されている。

こうしてみると、中学校「国語」は、小学校教科書にもあつ

三木：「国語」における古典教育

た作品冒頭を載せて、小学校での学びを振り返らせつつ、本編にも入ってゆく。そこで取り上げられる古典作品は殆ど共通しているのだが、各教科書で細かい工夫や差異はある。だからといって、公立学校で教える教員が独自に教科書を選択することはできないのだが、古典研究者の眼から見て着目すべき取り上げ方がいくつかある。ひとつは、「万葉・古今・新古今」というひとくくりではあるが、古典和歌を歌集単位で示したことである。それまでは一首ずつ現れていた和歌が、まとまりとして編纂されたことを意識させるものである。また、作品として『百人一首』もあがっている。そして、そこに「古今和歌集仮名序」が載せられることにも注意したい。

教科書会社の別で言えば、特に、光村図書版は二十六年度の改訂で、もともと充実していた小学校「国語」の五年生「季節の言葉」に四季を区切って「春はあけぼの」全文が読めるように配置したのである。後述するように、古典における季節感は重要な観点であるので、このような季節に関わる作品を四季に分けて示すことは非常に有益であると思われる（注10）。

また、六年生では、同じく「季節の言葉」の四季に二十四節気を分載し、中学校「国語」でも「季節のしおり」を設け、中学一年生で「朧月夜」「海」「紅葉」「冬景色」のようなかつての文部省歌など唱歌の歌詞を載せる。「春・夏・秋・冬のごよみ」欄も設けて中一・中学二の四季に二十四節気を三語ずつに分けて示し、中学二年生の春には「春はあけぼの」、中学三年生では

古典和歌と芭蕉・蕪村・千代女・一茶の俳句と「春・夏・秋・冬の季語」があがっている。

そして、三省堂の資料編「学びを広げる」にも「歌の言葉」の記載があるが、これは現代の歌い手の歌詞で、「詩の音読・暗誦」に「故郷」〈高野辰之〉や「茶摘」〈文部省唱歌〉（二年）、文語体の訳詩「埴生の宿」〈里見義〉（二年）、「ローレライ」〈近藤朔風〉（三年）などの唱歌の歌詞が載せられている。

一方、音楽の教科書を見てみよう。そこには、小学校・中学校とともに「こころのうた」「心の歌」という章に唱歌などが載せられるようになった。

小学生の音楽「こころのうた」（教育芸術社）

- 1年 ひらいた ひらいた・かたつむり・うみ・ひのまる
- 2年 かくれんぼ・虫のこえ・夕やけこやけ・はるがきた
- 3年 春の小川・茶つみ・うさぎ・ふじ山
- 4年 とんび・まきばの朝・もみじ・さくらさくら
- 5年 こいのぼり（いらかの波と）・子もり歌・冬げしき・スキーの歌

6年 おぼる月夜・われは海の子・ふるさと・越天楽今様
中学生の音楽「心の歌」（教育芸術社）

- 1年 浜辺の歌・赤とんぼ
 - 2・3年上 夏の思い出・荒城の月
 - 2・3年下 花・花の街・早春賦
- 明治に作られた「唱歌」（注11）は、大正、戦前・戦中・戦後

の昭和へと時代の変遷とその背景によって歌詞が変えられているものもあるが、文語体を口語体に変えるなどの改変は理解を進めるためでもある。この中で、小学四年に「もみじ」「さくらさくら」、六年生に「おぼろ月夜」が入り、「越天楽今様」まで取りあげられていることに注意しておきたい。「音読」以上に楽曲として歌われる歌詞は意味を完全に理解していなくても歌えてしまい、記憶にも残るものである(注12)。音楽の時間にどこまで歌詞の内容指導ができていくか、時間的にも期待できない部分があり、それを国語の時間にうまく繋ぐことができれば、正しい理解をメロディーにのせて記憶することができるだろう。

さて、これらの古典教材・文語文を前にして、講習時に小学校の教員のなかには「自分自身が古典が苦手なので、音読だけで終わっている」という方がいるし、中学の教員の中に「教科書が光村版に変わったので、大変な思いをしている」という声も聞かれている。そうでなくても、小学校では、中学・高校へと繋がる古典教育はどうあるべきか、入り口で苦手意識を持たれないか、中学校の教員からは、小学校の音読で親しみを持って「これは知ってる」という生徒に、興味を逸らさず、どのように理解を深めることができるのか、という声が出る。また、高等学校の教員では相変わらず、教室が〈受験古典〉で終わることの悩みと、正反対に古典に興味が全く無い生徒に関心を持たせるための悩みに分かれている。

ここでは、主に小学校での古典入門を中心に、中学校・高等

学校で関心を持たない生徒を引きつける方法について考えたい。

二、古典に親しむ

古典に関心を持たせるには、どうしたらよいか。

教員免許状更新講習では、現場で教える先生方に古典作品や韻文作品への取り組みや活動を聞き、意見交換を行っている。多く言及されるヒントをあげておきたい。

『百人一首』

- ・ 少しずつ暗記させて、達成感を味わわせる。
- ・ カルタ大会に向けて、教室でもカルタをする。

短歌・俳句の創作

- ・ 行事や遠足・自然観察の後に創作させる。
- ・ 色紙様の紙に俳句(短歌)と絵を書かせる。
- ・ 筆ペンで短冊様の紙に作品を書かせる。
- ・ コンクールなどに応募する。

古典作品の暗誦

詩の朗読

古典作品の視写

などがあげられる。これらは、小学校での取り組みが多いが、中学校でも行われ、時間が許せば高校でも実施したい。

中学生・高校生にはこの他にも、現代語訳されたものから親しむ方法があるが、そもそも活字を読むことを苦手とする生徒

もいる。谷崎源氏、与謝野源氏は言うに及ばず、近年ベストセラーになった瀬戸内源氏でも『源氏物語』に親しむ手段とするには難解であろう。もちろん、現代語訳の付された古典の文庫本も数多く出版されているし、現代語訳だけの入門書もある。しかし、現代語訳を手取る前に、古典作品に興味を持つことが必要となる。

そこで、コミック、アニメーションなどがあげられるが、『源氏物語』が忠実に漫画化された大和和紀「あさきゆめみし」（講談社）は、すでに今の生徒には難関であり、受験古典に取り組む生徒がストーリーや平安時代の生活の理解のために読む参考書的な位置にあるという。また、渡部泰明監修・杉田圭作『超訳百人一首 うた恋い。』シリーズ（メデイアファクトリー）は、「超訳」とあるだけに『百人一首』理解には遠いが、歌人を身近に感じられる利点がある。『百人一首』成立を語るプロローグは複雑な成立が簡単に理解できるよい導入になると思われる。この他、アニメ化、映画化もされた、末次由紀『ちはやふる』講談社）は競技かるたに取り組む若者を描いて、これも『百人一首』を身近に感じさせる効果は感じられる。

しかし、身近に感じて実際の古典作品に進むと、文法の縛りにくくられ雁字搦めになることは避けられない。

むしろ、小学校で児童自身が能動的に韻文作品を暗記したり、創作したり、百人一首大会の準備学習として、歌人や地名調べをする方が古典理解には近いのではないかと思われる。

それでは、どうすれば、文法を含む古典に親しめるのか。文語文で書かれた世界に慣れ親しんで入ってゆくしかないのではないだろうか。

身近なところでは、先にあげた唱歌の活用が提案される。まず、小学校四年生の教科書に載るのが、「さくらさくら」と「紅葉」である。明治の唱歌の制定時、最初は外国曲に日本語で作詞された唱歌は、次第に日本の曲に日本語の歌詞が付けられるようになるが、日本古謡も多く取り入れられている。もともと箏曲として作られたという「さくらさくら」は昭和十六年に改編されているが、その二度の歌詞を見てみよう（注13）。

さくら さくら①

さくら さくら

やよいの空は 見わたすかぎり

霞か雲か 匂いぞ出する

いざや いざや 見にゆかん

（文部省編集『箏曲集』・明治21（一八八八）年10月版歌詞）

さくら さくら②

野山も里も 見わたすかぎり

かすみか雲か 朝日におう

さくら さくら 花ざかり

『うたのほん』下・昭和16（一九四二）年3月版歌詞）である。

ちなみに稿者は、本学の講義「子ども学ゼミ」で、隔年に「歌の言葉を楽しもう」というテーマを取り上げている。保育者・小学校教諭を目指す学生たちが、保育園・幼稚園で重んじられる年中行事の中に取り上げられる歌を歌う、幼児に歌わせる行為の中で、音楽性ととも歌詞の重要性をどこまで認識しているのか、心許無いところがあつたためである。さらに、「このころの歌」のなかに慈円（慈鎮和尚）作の今様〔注14〕まで載せられる現在、小学校の授業の中でも歌詞の意味を知るだけでなく、教師の側には、背景として伝統的な和歌の理解が必要であると改めて感じている。古典和歌を授業する訳ではないが、古典語の世界を知ること、韻文の表現する世界を楽しむことができるようになるはずであると思われる。

そこで、「子ども学ゼミ」でも季節を感じる歌や唱歌、節句で歌われる歌を教材としている。この時間にも「さくら さくら」を考えさせた。

①の「いざや いざや 見にゆかん」の文語調は、②では「さくら さくら 花ざかり」と分かりやすくなっているが、三行目の①「霞か雲か 匂いぞ出ずる」、②「かすみか雲か 朝日におう」は、初見では（見渡すかぎり）霞や雲が立っていて、桜のよい香りがしていると学生は感じている。

「におう（にほふ）」は『日本国語大辞典』で【一】色_レが_レきわだつ、または美しく映える。また、何やら発散するもの、た

だよい出るものが感じ取られる」とあり、『デジタル大辞泉』でも、「にお・う（にほふ）【匂う】」は『丹（に）秀（ほ）』を活用した語で、赤色が際立つ意」として、

1 よいにおいを鼻に感じる。かおりがただよう。「百合の花がー・う」「石鹸がほのかにー・う」↓臭う

2 鮮やかに色づく。特に、赤く色づく。また、色が美しく輝く。照り映える。「紅にー・う梅の花」「朝日にー・う山桜」

とあるので、国語辞書で調べれば、2の意であることは理解できるのであるが、現在は1の意味で使われることがほとんどであることから調べるべき言葉であることに気づかせることが必要となる。

ここで、さらに、和歌の用例を示したい。桜が美しく咲き映えることを「にほふ」と詠んだ、

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにはへるは（開艶者）桜花
かも
（万葉集・卷十・一八七二）

山ざとにちりなましかば桜花にほふさかりもしられざらま
し
（後撰集・春中・六八）

に親しめば、現代語との相違に気がつくし、さらに、後撰集六八番歌との贈答歌である六九番歌では、

匂きき花の香もてぞしられけるうゑて見るらん人の心は
と詠まれ、「濃い桜の香りによつて（桜を）植えた人の心の素晴

らしさも分かる」と前の歌に応えているので、「にほふ」に視覚・嗅覚の両義があることも印象づけられる。

この「におう」を「(3)明るく照り映える。つやつやとした光沢をもつ。美しく、つやかである。中世になると、ほのぼのと美しい明るさにもいうようになった」(日本国語大辞典「におう」(二)の小項目)の意で用いているのが、小学校・中学校の「国語」教科書にも登場する「おぼる月夜」である。

朧月夜 (作詞 高野辰之)

一、菜の花はな島しまに 入日いりひ薄うすれ 見わたす山の端は 霞はふかし

春風はるかぜそよぶく 空そらを見れば 夕月ゆげかかりて におい淡あし

二、里さとわの火影ひかげも 森もりの色いろも 田中たなかの小路こうぢを たどる人も

蛙かわずのなくねも かねの音ねも さながら霞はめる 朧おぼろ月夜

〔『尋常小学唱歌』・大正3(一九一四)年6月・第6学年用〕

〔『新訂尋常小学唱歌』・昭和7(一九三二)年12月・第6学年用〕

〔『初等科音楽』四・昭和18(一九四三)年2月・必修曲〕

大正から昭和の音楽の教科書に採用され続けた名曲であるが、高野辰之は、「日の丸の旗」「紅葉」「春が来た」「故郷」などの曲も、岡野貞一による楽曲で作詞し、多くが愛唱されている。古典和歌に造詣が深いことは、例えば『古今和歌集』の時代から、「紅葉」は、山で照り映えるさまと、川に流れるさまが錦の織物と見立てられて詠まれてきたことを承けて、一番二番が構成されていることから窺える(注15)。

また、「さくら さくら」の歌詞の中に「霞か雲か」の語が見えるのは、

春霞はるかすみたなびく山のさくら花はなうつろはむとや色いろかはりゆく

(古今集・春下・六九・読人不知)

み吉野のよしのの山の桜さくら花はな白雲しろくもとのみ見えまがひつつ

(後撰集・春下・一一七・読人不知)

山やまざくらさきぬる時は常とこよりも峰みねの白雲しろくもたちまさりけり

(同・同・一一八・同)

吉野山八重たつ峰の白雲しろくもにかさねてみゆる花はな桜さくらかな

(後拾遺集・春上・一一一・藤原清家)

のように、「桜」は伝統的に「霞」「雲」の語とともに詠まれ、「霞か、雲か」と見まがうばかりに満開であることを示していることの理解にも繋がる。ちなみに、桜は、「霞か雲か」という唱歌でも歌われている。

霞はか雲くもか① (作詞 加部巖夫)

一、かすみか雲くもか はた雪ゆきか とばかり匂におう その花はなざかり

百鳥ももどりさえも 歌うたうなり

二、かすみは 花はなを へだつれと 隔へだてぬ友ともと 来て見るばかり

うれしき事は 世よにもなし

三、かすみで それと 見えねども なく鶯うぐいすに さそわれつつも

いつしか来ぬる 花はなのかげ

(文部省『小学唱歌集』第二編・明治16(一八八三)年3月)

かすみか雲か②（作詞 勝 承夫）

一、かすみか雲か ほのぼのと 野山をそめる その花ざかり
桜よ桜 春の花

二、のどかな風に さそわれて 小鳥もうたう その花かげに
いこえばうれし 若草も

三、親しい友と 来てみれば ひとときは楽し その花ざかり
桜よ桜 春の花

『4年生の音楽』・昭和22（一九四七）年版）

これも、歌詞が改められて歌い継がれた曲である。②の歌詞は、第二次世界大戦後も、中学校教科書などに題名もこのままで記載されている（注16）。

この「霞か雲か①」の一番の一行目は『古今和歌集』に見える見立て表現であるが、春の歌に「雪」が出てくる文言は、さすがに昭和二十二年に改められている。しかし、桜は、和歌の世界では散る桜を落花と喩えるばかりではない。歌詞は、

み吉野の山べにさける桜花雪かとのみぞあやまたれける

（古今集・春上・六〇・紀友則）

を承けた表現であろう。「霞」は山桜を「春霞峰にも尾にも立ち隠しつつ」（古今集・春上・五一・読人不知）と隠すものであり、その隠した花の色を映して「春霞色のちくさに見えつるはたなびく山の花のかげかも」（同・春下・一〇二・藤原興風）と、色々な彩りに染まっている。桜が積雪に見えるというのは、色もあるが、その満開の見事さ、花の量を詠んでいると思われる。

咲く桜の豪華さを「かすみか雲か、はた雪かとはかり（見えるほどに）」美しく「におう」と歌っているのである。友人との花見を喜ぶ二番には、雲林院の親王に従って花見に行った「いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは」

（同・同・九五・素性）の影響が、また、鳥に誘われる三番にも「けふのみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかげかは」（同・同・一三四・凡河内躬恒）や、「花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる」（同・春上・一三・紀友則）、「鶯のなくのべごとにてきて見ればうつろふ花に風ぞふきける」（同・同・一〇五・読人不知）などが窺われる（注17）。

しかし、この歌詞に和歌の背景があることは、その基盤となつた古今和歌集歌を学ばねば理解されない。だからこそ、作られた経緯とは逆に、歌詞から古今和歌集の表現に馴染んでいくことができるのではないだろうか。同様の指摘ができるのは、佐佐木信綱作詞「夏は来ぬ」である。

夏は来ぬ（作詞 佐佐木信綱）

一、卯の花の 匂う垣根に 郭公 早もきなきて

忍び音もらす 夏は来ぬ

二、五月雨の そそぐ山田に 早乙女が 裳裾ぬらして

玉苗ううる 夏は来ぬ

三、橘の かおる軒端の 窓近く 螢とびかい

おこたり諫むる 夏は来ぬ

四、棟ちる 川辺の宿の 門遠く 水鶏声して

夕月すずしき 夏は来ぬ
五、五月闇 螢とびかい 水鶏鳴き 卯の花さきて

早苗うえわたす 夏は来ぬ

(文部省『師範音楽』昭和18(一九四三)年6月)

題名「夏は来ぬ」では完了の助動詞「ぬ」を学習できるが、一番の歌詞は『古今和歌集』夏部を通して詠まれる「郭公」に「卯の花」が取り合わされる。「卯の花」は『古今和歌集』にも詠まれるものの、「夏は来ぬ」の歌詞は、『古今和歌集』から広がる八代集の夏の世界を詠んでいるといつてよいだろう。歌詞の三番には、「晋書」車胤伝・孫康伝の「螢雪」の故事も引かれているし、四番には、時代が下つて夏部に納涼を主題とした和歌が導入された影響が見える。一例として、歌詞の各番に關係の深い歌を、曲番号の下にあげておこう。

一、卯花のさける垣根の月清みい寝ずきけとや鳴くほととぎす

(後撰集・夏・一四八・読人不知)

二、早乙女の山田の代に下り立ちて急げや早苗室のはや早稲

(栄花物語・根あはせ・五二六・源信房)

三、今朝きなきいまだ旅なる郭公花橘にやどはからなむ

(古今集・夏・一四一・読人不知)

をりしもあれ花橘のかをるかな昔をみつる夢の枕に

(千載集・夏・一七五・藤原公衡)

よもすがら
終夜もゆる螢をけさ見れば草の葉ごと露ぞおきける

(拾遺集・一〇七八・健守法師)

四、あふち咲くそどもの木陰露おちて五月雨はるる風わたるな

り (新古今・夏・二三四・藤原忠良)

たたくとて宿の妻戸をあけたれば人もこず糸の水鶏なりけ

り (拾遺集・恋三・八二二・読人不知)

夕月夜空も涼しき松かげの浅ちがうへのひぐらしの声

(紫禁和歌集(順徳院)・二百首和歌・八三三)

これらの背景には、中国文化を吸収して仮名文字を自らのものとし、勅撰和歌集を営々と作り続けることで、和歌表現が日本の韻文ばかりではなく、文化や美意識、散文の基盤とさえなったことがあるのだろうが、それはひとつひとつの言葉の和歌的表現の歴史をたどることで見えてくるものと思われる。

三、教材としての和歌

小学「国語」では、韻文形式としての和歌を紹介したり、季節感を感じる例として取り上げられる和歌であるが、先述のように、歌集作品として読むのは中学「国語」の「万葉・古今・新古今」のくくりの中である。しかし、それでも、それぞれ「万葉8・古今4・新古4」(東京書籍)、「万葉9・古今3・新古今3」(光村図書)、「万葉8・古今4・新古今4」(三省堂)という数である(数字は掲載歌数)。三首で『古今和歌集』が理解できるのだろうか。それならば、季節ごとの頁で、季節感溢れる和歌を鑑賞する方が適しているのではないかと思われる。

和歌は、作者によって作られたとき、歌合や歌会の場に提供されたとき、勅撰集や私撰集（秀歌撰）に選ばれ、編集されたとき、そして、和歌だけが供されたとき、場によってさまざまな解釈が可能になる。知識を与えず、言葉の表すところだけで感じ、読み解く理解もあつてもよい、という（注7）の小森潔氏論文の第四節「常識を覆す授業」（読む）という行為によって初めて意味が立ち現れてくるという発想に触れた学生たちの驚きと開放感を述べる）の提言も非常に魅力的ではあるが、逆に、学生には、そこから、さまざまな資料、和歌が生まれた背景、和歌が置かれた場での解釈を知って、換言すれば知識を獲得して辿り着く理解の楽しさ、究める喜びを味わって欲しいと考える。例えば、小学生でも「社会（歴史）」と繋げ、時代を担った人々（階層）の作品が、彼らにとつての必然として時代の文学となることを理解させたい。

文法や言葉の（古語的）知識が必要であるから、古典はやっかいなのだと言わずに、古典を理解する鍵を手に入れて欲しい。それは、王朝和歌への理解なのである。

中学「国語」には『古今和歌集 仮名序』が載せられている。教員を志す学生ならば、日本で最初の歌論ともいわれる「仮名序」が中学生に理解できるか、と言わずにここに「鍵」があることを伝えて欲しいと思う。

①やまとうたは人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける

②世の中にある人ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり

③花に鳴く鶯水にすむ蛙の声を聞けば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける

④力をもいれずして天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり

（古今和歌集 仮名序）
この四文からなる文章は、和歌とは何か①②③、和歌の働きはどのようなことか④を述べ、起承転結をなし、以降の序文の文体の二本となるような和歌的技巧や対句的表現がちりばめられているが、「心」を「言の葉」にするという、どのような表現形式にも共通する理念を述べて、着目すべきは②であると思われる。①で述べた内容を繰り返しつつ、「心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出せる」和歌は、「見るもの聞くものにつけて」言い出すというのである。

この箇所は『古今和歌集全評釈』（注18）では、

②この世の中に存在している人間というものは、まわりにさまざまなき事が多いものであるから、誰しも、心に思っていることを、見る物や聞く物に託して、表現しているのである。

と訳されている。「つけて」については『名義抄』や『黒川本伊呂波字類抄』では「託」を「ツク」と訓むことが注される。

つまり、『古今和歌集』以降の勅撰集歌を王朝和歌と呼ぶなら、王朝和歌の特質は、心をそのままには述べない、物に託して詠む

ことということになる。そのために、『古今和歌集』では、心を託する「見る物」「聞く物」が必要となり、それが眼前の自然の景物になるのである。四季と恋の歌で構成される勅撰和歌集の基盤を作った『古今和歌集』は、心を託する四季の景物を厳選している。春の花なら、梅・桜、春の鳥なら鶯、夏の鳥なら郭公、秋の紅葉に鹿、雁、月、風。冬は雪にと託する思いは、少ない景物に限られるだけに、何で詠むか、ではなく、どのように詠むかに趣向が凝らされてゆく。

雪の木にふりかかれるをよめる 素性法師

春たてば花とや見らむ白雪のかかれる枝にうぐひすぞなく

(古今集・春・六)

この早春の歌で、暦が春になったというだけで白雪を白梅と見誤って喜んで歌っているのは、実は鶯ではなく、素性法師もしくは詠歌主体である。作者が春を待つ心を、鳴いている鶯に託したのである。そして、『古今和歌集』で初春に詠まれた白雪は、立春になっただけで「花」と見えてしまうものと定義されていく。「雪」に「雪」以上の意味が付されたとき、「雪」は「歌のことば」になるのである。

王朝和歌の理解のために、『歌枕歌ことば辞典』(注19)や『歌ことば歌枕大辞典』(注20)などが出版されているが、これらを読むことは知識の獲得には役立つだろう。しかし、それでは、また古典は受験古典になる。

そこで、今年度、和歌文学会で非常に有益な発表がされたこと

を紹介したい。岡山県玉野市立玉野備南高等学校の三谷昌士氏による「歌ことばを視座におく高校古典の可能性―新しい必修修科目「言語文化(仮称)」を見据えて―」である(注21)。あくまで、高校生を対象とされたものであるが、「歌ことばを視座に置く授業展開例」を示された。鈴木日出男氏の研究(注22)から「歌ことば」を定義し、『古今和歌集』理解のためには『古今集』の趣旨が、表現する日本人の「心」の表現であることを先ず知らしめてほしい、「心」を「見る物」「聞く物」に託した結果として、縁語・掛詞・序詞や「見立て」などの表現技法が用いられるのであって、その反対ではない、「修辞技巧から教えるのではなく、春を待つ心、春を惜しむ心、突然の秋風に驚く心、そして自然と一体となっている「恋のうつろひ」「人の世のうつろひ」の中に、日本文化の根源になった『古今集』的表現の本質があることを説いてほしい」という片桐洋一氏の言葉(注23)を指針として、生徒自身に歌ことばのイメージを掴ませようとするものである。現在、発表資料しか手許にないが、学習指導構想1『古今集』の歌を通して歌ことば「桜」のイメージを生徒につかませる。同2『古今集』の歌を通して歌ことば「山里」のイメージを生徒につかませる。(4)歌ことば「ほととぎす」に着目して歌を味わう授業について、など、歌ことばという「言語文化」に着目した授業展開例を示し、従来とは異なる授業の可能性の一端を示すものである。これは、現在、注目される能動的学修でもあり、生徒自身に言語によって築かれた文化を体感させられるものである

う。

現在の我々に王朝和歌の理解が困難であるのは、共通言語である「歌ことば」を理解していないからである。この鍵をあける工夫を今後とも考察してゆきたい。

*和歌の引用は、『新編国歌大観』により、かなを適宜漢字に改めた。また、『万葉集』については、西本願寺本訓に適宜漢字を宛て、旧番号を付した。

〈注〉

1 ①②③の数字は稿者による。

2 うさが欺く、古事記原文の「和邇(わに)」（鮫とされる）の扱ひも、東京書籍版は「さめ」と記し、光村書籍版は「わに」と記し、「ここ」では、さめのことをいう注を付すなど、テキストにより異なっている。小学二年生では、もちろん『古事記』にどうあるのかや、『日本方言大辞典』で『古事記』のこの箇所を例として、「鰐」を兵庫県但馬／島根県では「鰐」は「鮫」を指すとすることなど触れられないのだが、光村書籍版のように、説明をつけても「わに」を出すことで、言語感覚の優れた児童には言葉（表現）の不思議さ・おもしろさに触れるきっかけを伏線としても与えるような工夫が欲しいと考える。

3 例えば、日本文学科を卒業し、国語科教員になった卒業生との研究会からまとめられた、土方洋一編『古典を勉強する意味ってあるんですか？』ことばと向き合う子どもたち（平成24年5月・青簡舎）では、中学校・特別支援学校・高等学校での「ことばの教育」や「古典教育」の実践が報告されている。

また、和歌文学会の監修により、コレクシヨン日本歌人選（全60冊・笠間書院）という柿本人麻呂から寺山修司、塚本邦雄まで日本の代表的歌人の秀歌を鑑賞するための秀歌撰が編まれた（平成23年3月）

24年12月）。企画の趣旨は高校生にもわかりやすく読める和歌鑑賞本を編纂することであった。

さらに、同学会出版企画委員会企画による、渡部泰明編『和歌のルール』（平成26年11月・笠間書院）は、和歌の修辭を解説した書であるが、「高校の教科書に載っている作品を中心に和歌の魅力を味わうのに十分な10のルールを選びました。初めて和歌を読む人々を思い浮かべて書かれた、分かりやすく本格的な和歌案内書です」と表紙にあるように、高校生にも読めるという点をアピールしている。

4 石塚修氏

・大学センター試験に出題された和歌は『松陰中納言物語』、『うつほ物語』、『夢の通ひ路物語』、『しぐれ』などの物語和歌で、高校生は散文にまぎれた和歌を読まされている現状の指摘。

・現行『学習指導要領』では「和歌に親しむ」ことが最終的な目標となるので「和歌を詠む」ことで、「創作活動」、披露することで「話すこと・聞くこと」、和歌を知ること、和語の知識を深め、「国語の特質」を理解できるという提言。

・「散文」に対する「韻文」の教育の中心的素材として和歌をすえる学びが望まれるなかで、和歌単独で高校生のような学習者たちにはたしてどれだけ興味・関心を持たせて楽しめる授業が展開できるかという問いかけをされた。

5 渡辺健氏

・実際の高校の現場では、大学進学易化と相俟った大学入試機会の多様化が、教員の多忙化、教育の質の低下につながり、高校生の学ぶ機会が減少していると指摘。

・和歌学習に効果的であった歌物語『伊勢物語』の授業取り組みの紹介。

・教科書を魅力的にするためにさらなる写真の活用や写本の提示、発見や新説の紹介など若者の知的好奇心を刺激し、学的探究心を誘うような工夫やしかけの必要性を説く。

6 渡部泰明氏

・「古典文学をアクティブ・ラーニングでまなぶ 和歌を演じるワークショップ」（日本文学アクティブラーニング研究会）リポート笠間58号・平成27年5月）に注目し、和歌を演劇化し、生徒や学生に古典

作品を能動的主体的に感得させようとする試みを紹介する。
 ・能動的な参加という意味で、和歌みくじをつくる(平野多恵氏)、『うた恋い。』を創作する(杉田圭氏)なども紹介。
 ・「和歌をつくる授業」は、本来の和歌の創作と享受の関係を探ることに繋がる⁷と提言された。

7 以下に目次をあげる。

- ・高校の「教育」から大学の「研究」への連続…………… 畠山俊
- ・研究を教育へ―結びつける授業・常識を覆す授業…………… 小森潔
- ・研究と教育の架橋―専門性の行方…………… 中野貴文
- ・高校の国語の授業で古典を教えるということ…………… 久木元滋昌
- ・「古典学習」と文法―助教詞をめぐる二、三の問題…………… 依田 泰
- ・言葉の連続性を意識した国語教育と日本語研究…………… 伊藤博美
- ・万葉歌は叙情歌か…………… 梶川信行
 - ―高等学校「国語総合」の「万葉集」……………
- ・模擬授業の中の「万葉集」―《授業芸》の誕生…………… 上野 誠
- ・『源氏物語』『桐壺』冒頭の授業…………… 保戸塚 朗
- ・生徒の「今」を広げる授業…………… 大谷杏子
 - ―『讀岐典侍日記』に描かれた「死ぬ瞬間」……………
- ・和歌文学研究と高等学校における授業実践について…………… 小林俊洋
 - ―「俊成自讃歌のこと」を教材とした実践報告……………
- ・近世文学作品の導入教材としての可能性…………… 千野浩一
- ・正岡子規「瓶にさす」歌の鑑賞…………… 中村ともえ
- ・文学と教育は不倶戴天の敵…………… 山本 良
 - ―中島敦「古潭」研究への補助線……………

8 「春はあけぼの」を活かすために―古典教材としての新たな試み」(『新しい作品論へ』、『新しい教材論へ』古典編3) 右文書院、平成15年)

9 「中学校・高等学校における教師の古典教育意識―長野県内アンケート調査の結果から」『信州大学教育学部紀要』一一二号、平成16年)

10 東京書籍版にも二十六年度からは「日本語のしらべ」(春・夏・秋・冬)が取り入れられたが、こちらは、四年生以上に、古典から現代の詩や韻文を中心として紹介している。

11 松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ』明治・大正・昭和初中期』(和泉書院・平成23年)、山東功『唱歌と国語―明治近代化の装置』(講談社選書メチエ505・平成20年)に詳しい。

12 (注11)の山東功氏の著書には、明治五年(一八七二)の学制頒布以降、音楽教育として「唱歌」が授業科目とされつつ、その教科内容に苦慮した歴史が詳しい。他教科の教科内容を「唱歌」によって暗記するように地理教育や文法の教授を意図した歌詞が作られたことが指摘されている。

13 以後、引用の歌詞、作品の出版などは(注11)松村直行氏著書による。

14 越天楽今様 慈鎮和尚 作歌

一、春のやよひの あげぼのに よもの山辺を 見たせば

花ざかりかも 白雲の かからぬみねこそ なかりけれ

二、花たちはなも におうなり のきのあやめも かおるなり

夕ぐれ様の さみだれに 山ほととぎす 名のるなり

『拾玉集』第五には「今様」と題して、四首が載せられる。

春のやよひの あげぼのに よもの山べを 見たせば 花ざかり

かも しら雲の かからぬみねこそ なかりけれ

(五七二九・花)

花たちばなも にほふなり 軒のあやめも かをるなり ゆふぐれ
さまの 五月雨に 山時鳥 なのりして

(五七三〇・郭公)

秋のはじめに 成りぬれば ことしもなかばは すぎにけり わが
よふけ行く 月影の かたぶく見るこそ あはれなれ

(五七三一・月)

冬の夜さむの 朝ぼらけ ちぎりし山路に 雪ふかし ころろの跡
は つかねども おもひやるこそ あはれなれ

(五七三二・雪)

15

「紅葉」

一、秋の夕日に照る山もみじ
濃いも薄いも数ある中に
松をいろどるかえでや葛は
山のふもとの裾模様

二、谷の流れに散り浮くもみじ

波にゆられて はなれて寄って
赤や黄色の色さまざまに

水の上にも織る錦

『尋常小学唱歌』・明治44(一九一一年)6月・第2学年用)

『新訂尋常小学唱歌』・昭和7(一九三二年)4月・第2学年用)

(注11)の松村直行氏著書による。

17 16 『古今和歌集』には見えない「百鳥」の用例も、梅の花の例ではあ
るが、「梅の花今さかりなり百鳥の声の恋ほしき春來たるらし」(万葉
集・巻五・八三四)とみえる。

18 片桐洋一『古今和歌集全評釈』上・講談社・平成10年

19 片桐洋一・笠間書院・増訂版・平成11年

20 久保田淳・馬場あき子(編集)・角川書店・平成11年

21 第六二回 和歌文学会平成二八年度大会(東京大学本郷キャンパ
ス・十月九日)

22 『連想の文体 王朝文学序説』岩波書店・平成24年、『古代和歌史
論』東京大学出版会・平成2年

23 「古今集的表现の本質」『古今和歌集研究集成』第一巻所収・風間
書房・平成16年)から、三谷氏の引用、傍線を付した箇所を引用した。